

『卜居集卷之下』注釈(一) 山居三十首

山口 旬

本稿は「卜居集卷之下」注釈を継いで、下巻の冒頭から約半分を占める「山居三十首」に注釈を試みたものである。上巻に収められた「山莊十首」は、方秋厓や楊誠齋作品などの同題の五言律詩連作を祖述した習作的作品であったが、この「山居三十首」は、五言律詩ではなく制作がより困難な七言律詩で、しかも三十首という長い連作の発展的作品になっている。しかも、三十首は、「上下平韻を用ゐる」と自注にあるように、近体詩に用いる平声三十韻を一詩毎に順番に替えていくという形式的にも困難な意欲作である。平声三十韻の中には稀にしか用いず使いつらい險韻も含むからだ。

卷頭には、「常陸 柳埜大窪行 天民著撰、伊勢 素堂中野正興子興批評、武蔵 碧海松井壽 延年校訂」とあり、上巻と同じく詩は大窪詩佛、評部分は中野素堂が執筆している。校訂の碧海松井壽延年は、『詩聖堂詩話』・『臭蘭稿甲集』に紹介されている人物で、後者には「名は壽。碧海と号す。東都の人」とある。

77 ◇1 山居三十首(用上下平韻)(上下平韻を用ゐる。)

世人争得到茲中	世人 争でか茲の中に到ることを得ん
家住春山東又東	家は住す 春山の東 又 東
幾道寒流至池合	幾道の寒流 池に至て合し
一條荒徑入沙空	一條の荒徑 沙に入て空し
藤垂屋角時猿下	藤は屋角に垂れて 時に猿あつて下り
雲鎖峰頭只鳥通	雲は峰頭を鎖して 只だ鳥のみ通ず
曆日雖無花自有	曆日 無からんと雖ども 花 自ら有り
早知二十四番風	早く知る 二十四番の風
清灑新美。模寫景象太好。就中第六句其景宛然在目睫之間。	

清灑新美。景象を模寫して太だ好し。中に就て、第六句、其の景、宛然、目睫の間に在り。

【訳文】世間の人に、どうしてここまで至ることができようか。春の山中の東また東に行つたところに家を構えている。幾筋もの寒冷

な川の流れが池までたどりついて一つに合し、一本の荒れ果てた道は、いつの間にか水際に達して消えてしまふ。藤は屋根の角に垂れて、ときには猿が伝い下りて、雲は峰の上を閉ざして、ただ鳥だけが行き来できる。曆などというものはないが、それでも季節が来れば必ずから花は咲く。山中ゆえ、花を咲かせる二十四番の風も早く吹くのだ。

清らかで美しく、新しい美しさの詩だ。景色を非常にうまく表現している。中でも第六句は、景色があたかも目の前にあるようだ。

○山居 山中の住居。古来あるテーマで、山水詩の開祖とされる謝靈運に「山居賦」がある。○二十四番風 二十四番花信風。小寒には梅などのように、二十四節氣の小寒から穀雨までの間の各氣それぞれの花の開くのを知らせる風だが、ここでは山中なので時期がずれることを言う。

◎前対は第一句の世間から隔絶した土地「菴中」であることを敷衍し、後対一句目は第二句の「家」を、後対二句目は第二句の「春山」をそれぞれ敷衍している。そして尾聯二句でその全てを総合する構成である。

◎この詩は比較的容易な上平声一東の韻である。

老屋頽然倚古松	老屋 頽然として 古松に倚る
一溪春晚斷行蹤	一溪 春晚て 行蹤を斷つ
落花寂々人甘寂	落花 寂々として 人 寂を甘じ
豊草茸々鹿養茸	豊草 茸々として 鹿 茸を養ふ
占静竹樓常不鎖	静を占むる竹樓 常に鎖さず
弄機水碓夜仍春	機を弄する水碓 夜も仍ほ春づく
深知物我俱相得	深く知る 物我の俱に相得ることを
蓬髮也從心性慵	蓬髮 也た 心性の慵きに從ふ

前聯新異。 前聯、新異。

【訳文】古びた家は崩れかかって老松に寄りかかってからうじて立っている。たった一本の谷川も、春が深まるとすっかり往来すらできない。花はひっそりと落ち、人は寂しさに甘んじ、草はふさふさと茂って、鹿は柔かい角を養っている。静けさを独り占めする竹で作った高樓はいつでも錠を下ろすこともなく、からくりを動かして水臼は、夜でもなお臼づき続けている。深くさとするのだ、山居とそれを取り巻く自然と自分が寄り添って一体化するのを。ぼうぼうに乱れた髪もまた、心のものうさをそのまま表している。

前聯は新しくユニークである。

○寂々～寂 「寂々」はひっそりと静かな様。「寂」は寂しい、の意。

○茸々～茸 「茸々」は雑草が繁る様。「鹿茸」は薬名。鹿の古い角が落ちたあとに生える柔らかい角を干したもの。○竹樓 竹で作った樓。宋代の詩人、散文家・王禹偁が建てた樓名。○物我 外物と自己。山居している自分とそれととりまぐ自然。

◎一、三、五句は山居の様子、二、四、六句はその環境を述べ、第七句「物我」で両方を受けるといふ構成である。

◎中野評に「前聯、新異」とあるように「寂」「茸」をそれぞれ一句の中で疊字と単用字で意義を変えて用いて更に対句にしたのは凝った趣向である。

◎上平声二冬。

79 ◇ 3

浪送桃花下急瀧
勝遊多在水雲邦
僧雛邀處登松閣
童稚牽時至蘚缸
欲寡堪長全隱操
句高不易入村腔
團圞話裡聞人說
却愧將吾比老龐

浪 桃花を送て 急瀧を下る
勝遊 多くは 水雲の邦に在り
僧雛 邀る處 松閣に登り
童稚 牽く時 蘚缸に至る
欲は寡にして 長く隱操を全うするに堪え
句は高くして 村腔に入り易からず
團圞話裡 人の説くを聞く
却て愧づ 吾を將て老龐に比することを

【訳文】桃の花が浪に乗って早瀬を下ってくる。よい遊覧の多くは川に霧のかかる地にある。小僧が迎えてくれて松のある樓閣に登り、子供を連れて苔の生えた飛び石のところに行ってくる。欲はたいしてないので長く隠居しようという心を全うすることができらるだろうが、詩句は高尚で田舎の調子には合わない。輪になって語り合う中で人の話を聞けば、かえって愧じることだ、自分を龐徳公に喩えているのを。

○老龐 龐徳公。襄陽の人。岷山の南、一度も城内には入ったことがなかった。：諸葛亮を臥龍、龐統を鳳雛、司馬徽を水鏡と評した人物である。

◎前半四句は山居の環境、後半四句はそこでの生活を述べる構成である。

◎上平声三江

80 ◇ 4

休嗤柳垞醉生涯
細雨輕風興自隨
案上常繙高士傳
壁間漫寫野僧詩
牽筇步徑消微倦
戴笠過橋是一奇

嗤ふことを休めよ 柳垞の醉生涯
細雨 輕風に 興 自ら隨ふ
案上 常に繙く 高士の傳
壁間 漫に寫す 野僧の詩
筇を牽き徑に歩して 微倦を消し
笠を戴き橋を過る 是れ一奇

従古雲林多被畫

古より雲林 多く畫かる

又曾狂態任君知

又 曾て 狂態 君が知るに任す

後聯非尋常對偶灑青黃者之可比也。且此二句有画圖而後第七句言多被画焉。轉合之可法者也。君字泛指世人與起句休嗤之泛辭喚應。高手一着不苟也。

後聯、尋常對偶、青黃を灑ぐ者の比すべきに非ざるなり。且つ此の二句、画圖有て後、第七句、「多く画かる」を言ふ。轉合の法なるべき者なり。君字、泛く世人を指し、起句「休嗤」の泛き辭と喚應す。高手の一着、苟しからざるなり。

【訳文】笑わないでほしい、この私の酔いどれ人生を。霧のような雨、わずかな風にも(酔ったように)興を催してしまふのだ。机の上には、常に高士の伝を繙き、壁には氣ままに田舎の僧の詩を写しかけている。杖を持つて小道を歩いて、ちよつとした疲れを消して、笠をかぶつて橋を渡れば(虎溪三笑ではないが)それもまた一興だ。昔から雲のかかった林は多く描かれてきた。(私の場合も)また、すなわち狂態を君たちが知つて描くのおまかせする。

後聯は普通の対で美しくいろいろを整えようとするものと比較するべきではない。しかし、この二句の中に虎溪三笑のような画が含ま

れていて、その後第七句に「多く画かる」という。律詩の構成の起承転合に適つたものだ。(第八句の)「君」という字は広く世間の人たちを指し、第一句で「嗤ふことをやめよ」のひろく呼びかけた語と対応している。名手は一字下すのもおろそかにはしないものだ。

○柳垞 大窪詩佛の名。

○青黄 青と黄。美しいいろいろどり。

◎後聯の「消微倦」と「是一音」は対をなさない。そうした破格を容認して内容を重視する、というのが中野素堂評の主張である。

◎第一句「醉生涯」の内容を前聯が受け、第二句「興」を後聯が受け、それを尾聯で総合する構成である。

◎上平声四支。

81 ◇5

獨樹作橋巖作屏

獨樹を橋と作し 巖を屏と作す

送迎常懶客常稀

送迎 常に懶くして 客 常に稀なり

泉元清冷魚兒瘦

泉は元と清冷にして 魚兒 瘦せ

苔自蒙茸石筍肥

苔は自ら蒙茸として 石筍 肥たり

得竹新寬編鶴籠

竹を得て新に寬く鶴籠を編む

搗藤窄窄製樵衣

藤を搗て窄く樵衣を製す

無管乃識身安穩

管むこと無くして乃ち識る 身の安穩たるを

不管理間是與非

管せず 人間の是と非と

曾字有味。昔日製樵衣今乃不然也。今日所為則編雀籠。遺閑之事其無當可知。

曾字、味有り。昔日、樵衣を製し、今は乃ち然らざるなり。今日、為す所は則ち雀籠を編む。閑を遣るの事、其の當み無きを知るべし。

【訳文】一本の丸木を橋として、大岩を扉としている。送り迎えもいつでも面倒で、したがって客も常に稀である。湧き水はもともと清らかで冷たく、小さい魚は痩せこけていて、苔は自然にはびこつて（苔の生えた）岩石は肥えたように見える。竹を手に入れて新たに鶴の籠をひろく編み直し、藤をついてかつて窮屈に木樵の衣を作つた。何もやる事がなくてはじめて身が安らかなのを覚る。世間の評判などは我れ関せずだ。

「曾」の字に味わいがある。昔は木樵の衣を作つたが今ではそうではないのである。今、やっているのは、鶴の籠を編んでいること。ひまつぶしの仕事で、その他にやる事もないのである。

◎第一句を前聯、第二句を後聯が受け敷衍する。そして、前者を第七句、後者を第八句で受けてまとめる構成である。

◎上平声五微。

82 ◇ 6

晴日三竿竹影疎

晴日 三竿 竹影 疎なり

烟蒸餘濕欲乾初

烟は蒸す 餘濕 乾んと欲する初め

愛林唯採過墻筍

林を愛して 唯た墻を過る筍を採り

鋤圃纔留取種蔬

圃を鋤て 纔に種を収るの蔬を留む

村裡交遊皆野老

村裡の交遊 皆な野老

山中餐味只溪魚

山中の餐味 只だ溪魚

禮儀寧為吾儕設

禮儀 寧ろ吾が儕の為めに設けんや

散髮相逢不用梳

散髮 相逢て 梳るを用ゐず

森整圓熟一篇佳律。第一句下疎字知所以林之可愛也。第二句濕乾見所以圃之可鋤也。

森整、圓熟の一篇の佳律なり。第一句、疎字を下す。林の愛すべき所以を知るなり。第二句、濕乾、圃の鋤くべき所以を見るなり。

【訳文】晴れて日は高く昇り、竹の影がまばらに映っている。露はまだ蒸するようだが、そろそろ余計な湿気は乾こうとする頃だ。林を愛してはいるが、ただ垣根から飛び出てきた筍だけを採り、畑を耕して、わずかに種を取るだけの分の野菜だけを残してある。村の中の交わりといったら田舎おやじばかり、山の中のご馳走と言つたら溪川で釣れたばかりの魚くらいだ。堅苦しい礼儀など私の仲間

ために作ったりしようか。隠者らしい総髪の頭もぼさぼさで、仲間
に会うからと言って櫛を入れたりしない。

きちんと整った田熟した優れた律詩である。第一句に「疎」の字を
下したので、林の愛すべき所以がわかるのである。第二句の「湿乾」
には畑を耕すべき理由があらわれている。

◎第一句は三句、二句は四句を受けて、その前半四句を後聯と尾聯
が受ける構成である。

◎上平声六魚。

83 ◇7

耐喜山居一事無 喜ぶに耐えたり 山居 一事の無きことを
安閑盡日然吟鬚 安閑 盡日 吟鬚を燃る
護將格律詩難穩 格律を護將して 詩 穏やかなり難く
擲却心機夢自孤 心機を擲却して 夢 自ら孤なり
呼婦時収烹茗水 婦を呼て 時に茗を烹る水を収めしめ
命童且採織簾蒲 童に命じて 且つ簾を織る蒲を採らしむ
山雲爛熳梅天近 山雲 爛熳として 梅天 近し
聴取杜鵑啼過湖 聴取す 杜鵑の啼て湖を過ぎしを

【訳文】まことに喜ばしい、この隠者にひとつもやることのないのは。

安閑として一日中鬚をひねって詩を考えている。詩の形式を守ると、
詩はいっそう穏やかになりづらく、考え事を全て捨てきってしまった
ば夢は自ずからそれと関係ない独立した夢だ。妻を呼んで時には茶
を煎れる水を汲んでもらい、子供に命じてしばらく簾にするための
薄を採つて来させる。山の雪は溢れてきてそろそろ梅雨の季節も近
い。ホトトギスが啼きながら湖を過ぎていったのが聞こえた。

◎第一句を後聯、第二句を前聯と、順番を入れ替えて受け、尾聯は
やや独立し、そうした山居の一場面、という構成である。

◎上平声七虞。

84 ◇8

霖雨初晴喜鵲啼 霖雨 初て晴て 喜鵲 啼く
竹闌干外草侵畦 竹闌干外 草 畦を侵す
伐桐欲作登山屐 桐を伐て 作んと欲す 山に登る屐
閨譜漫知鋤藥犁 譜を閨して 漫に知る 薬を鋤く犁
酒為沈痾常定量 酒は沈痾の為に常に量を定め
詩因偶興每無題 詩は偶興に因て毎に題無し
情慵習矣終成性 情慵 習へり 終に性と成る
未果尋僧訪隱棲 未だ果さず 僧を尋て 隱棲を訪はんことを

後聯精切。肥遁之貞致在言外。

後聯、精切。肥遁の眞致、言外に在り。

【訳文】長雨がやつとあがつて、鶉が喜んで鳴き声を立て、竹の欄檻の向こうでは、草が畦いっばいにはびこつてくる。桐の木を伐つて、山登り用に下駄を作ろうとし、凶鑑を調べて、薬を鋤く犁はだいたいわかった。酒といえは、持病のためいつも量をきめており、詩はといえは、その時その場の興で作りいつも題は無い。怠惰を習慣にしている、ついに生まれつきの性質のようになった。いまだに、僧の隠棲を尋ね訪れることを果していない。

後聯は、精密で適切な表現である。世を捨てて隠遁しようという本当の方向性が、言外にある。

○惰慵 懶惰。宋・蘇轍「次韻光庭省中書事」に「放浪江湖久惰慵、安排誰置從官中。」○致 いきつくところの意より、転じて、物事

の方向と結果。
◎起聯は山居の状況、前聯はその生活の一場面、後聯は生活全般の状況を述べ、尾聯で総合する構成である。

◎上平声八齊。

85 ◇ 9

眞成誰識這中佳 眞成に誰か識る 這の中の佳なることを

事々無不渾好懷 事々 渾て好懷ならざる無し

看水樓成高聳竹 水を見る樓成て高く竹を聳き

對山門設窄編柴 山に對する門設けて窄く柴を編む

藥壇下種新修檻 藥壇 種を下して 新に檻を修め

菊畹移苗更換牌 菊畹 苗を移して 更に牌を換ふ

妻子莫嗔生計冷 妻子 嗔ること莫れ 生計の冷なるを

由来身與世人乖 由来 身は世人と乖く

此詩纖悉而清雅所以不易得也。

此の詩、纖悉にして清雅。得易からざる所以なり。

【訳文】眞実本当に誰が見分けているのだろうか、この境の素晴らしさを。ここでは一事一事が全て好い気分でないものはない。川によく見える高樓ができて、そこには高く竹を聳いて、山に面した門を設けて、ぎつしりと柴を編みこむ。藥草の花壇に種を撒いて、新しく柵を繕い、菊の畑には苗を移して、更に花の名札を交換した。妻子よ、怒つてはいけな、生計の寒いのを。元来、私は世間の人の当たり前前道の道からははずれているのだから。

この詩は、細かいところまで行き届いて清らかで上品だ。得やすい詩でない理由である。

○好懐 陶淵明「飲酒詩」に「田夫有好懐」とある。

○高聳竹 二首目に「竹樓」の語がある。

◎起聯「這中佳」と「事々」を前後聯で具体的に述べ、尾聯で全体を結ぶ構成である。

◎上平声九灰

86 ◇10

昔曾乘興上崔嵬	昔 曾て 興に乗じて 崔嵬に上る
今笑醉来眠只催	今 笑ふ 醉来て 眠 只だ催すことを
爐氣熏人醒未癒	爐氣 人を熏じて 醒 未だ癒えず
樹陰侵枕夢初回	樹陰 枕を侵して 夢 初て回る
半庭曝繭風前雪	半庭 繭を曝す 風前の雪
一室磨茶雨後雷	一室 茶を磨す 雨後の雷
衣食雖貧亦知足	衣食 貧と雖ども 亦た足ることを知る
何妨高臥避塵埃	何ぞ妨げん 高臥 塵埃を避くるに

【訳文】昔、興に乗じて山頂に登ったこともあるが、今は、酔っ払ってただ眠気を催すだけなのを笑う。爐の熱気が、人を熏じるように、宿酔はまだ醒めない。樹の陰が、枕のところまで届くほど日が高くなり、夢がやっと覚める。庭の半ばを使って、繭を曝しているのは、風の吹く前の雪のようで、一室では、茶を挽いていてその音は、雨後の雷のようだ。衣食は、貧しいと言ってもまた余計な望みは持つ

ていない。貧乏で何が困るだろうか、枕を高くして眠ったり、俗事を避けたりするのに。

◎前聯は第二句の「醉来眠」を受け、後聯は第七句の「衣食」をそれぞれ述べる。第七句は第八句にかかり、第八句は前半四句と第五・六・七句を受けて総合する構成である。

◎上平声十灰。

87 ◇11

一間茅屋鎖嶙峋	一間の茅屋 嶙峋に鎖す
本與樵村隔澗鄰	本と樵村と澗を隔てて鄰る
竹岸暗中開酒徑	竹岸 暗き中 酒徑を開き
松園淨裡積茶薪	松園 淨き裡 茶薪を積む
濃烟微雨還林鳥	濃烟 微雨 林に還る鳥
淡日輕風渡水人	淡日 輕風 水を渡る人
昨夜燈華頻綴玉	昨夜 燈華 頻に玉を綴る
江僧今日送香蓴	江僧 今日 香蓴を送る

五六格最高詩家之真面目也。然句句欲若此強為之則不為輕弱無味之詩者鮮矣。只可自用工着力之間自然得之耳。

五六の格、最高。詩家の真面目なり。然れども、句句、此の若から

んと欲して、強て之を為せば則ち輕弱、味無きの詩と為らざる者、鮮し。只だ、工を用ゐ、力を着すの間より自然に之を得べきなるのみ。

【訳文】 一間間口の狭いあばら屋で、深い崖に鎖されており、もともと木樵の村と谷川を隔てて隣り合っている。竹が茂った岸の暗い中に、酒を求める為の小道を開き、松の植わった庭の清らかな中に、茶を沸かす為の薪を積む。濃い霧と小雨の中、林に還る鳥が飛び、淡い日射しとそよ風の中、川を渡る人がいる。昨夜、灯心の花がしきりと結んで何の吉兆かと思つたが、今日になつたら、川辺の僧が香り高い蓴菜を送つてくれた。

第五・六句の詩の格調は最高である。詩人の本来あるべき姿だろう。しかし、どの句もどの句もこのようにしようとして無理にそうすれば軽く弱くなり、味の無い詩とならないものは稀である。ただ、工夫して力を尽くしたところから自然にこうした表現を得るべきなのである。

○江僧 通常は山僧だが、谷川沿いを描いた詩なので江僧と言つた。

◎第一句を四、五句で、第二句を三、六句で展開する。前六句で山居の環境を述べ、尾聯でそうした中での人事を述べる構成である。

◎上平声十一真

88 ◇ 12

竹韻 溪聲 秋十分

閑人不寐 永霄聞

猿心 寒處 池 月を生じ

鶴夢 冷なる時 松 雲を帶ぶ

肥遯 從來 唯だ我が事

樵蘇 豈に敢て 他の為に勤んや

仰觀 天象 知時 穩 仰で 天象を觀て 時の穩なるを知る

笑祝 人間 有聖君 笑て祝す 人間に聖君有ることを

溫雅老勁 可三復矣。

溫雅老勁、三復するべし。

【訳文】 竹のそよぐ音、谷川のせせらぎの音、すべて秋の響きだ。

閑人である私は寝ることもなく、一晚中聞いている。猿のような俗心でもぞつと感じさせるのは、池面に月が映つた時であるし、鶴のような脱俗の夢の中に冷気を感じるの、菓のある松が雲を帯びた時だ。ゆつたりと隱遁するのが、以前から私がただひとつの仕事で、どうして、生活に必要な木こりや草刈り以外の仕事をしようか。天の形を仰ぎ見て、時代が穩やかに治まっているのを知り、笑つて人間世界に聖君が居ることを祝うのである。

穏やかで品が良く達者で弛みのない詩で、幾たびも繰り返し吟じられるべきだ。

○天象 「天垂象、見吉凶、聖人象之。」「易繫辭上」から天体の現象をいう。 ○三復 「南宮三復白圭、孔子以其兄之子妻之。」「論語先進」とあり、孔子の門人南宮は『詩経大雅』の詩「白圭」を幾たびも吟じ認められた。

◎第一句を前聯が、第二句を後聯が展開し、尾聯は独立して、感慨を述べて結ぶ構成である。

◎上平声十二文。

89 ◇13

數曲溪流掩窄門

數曲の溪流 窄門を掩ふ

掩門樹密早黃昏

門を掩ふ樹 密にして 黃昏早し

月升半岸雲先白

月 半岸に升て 雲 先づ白く

雨過深山水暗渾

雨 深山を過て 水 暗に渾る

移竹元因一時興

竹を移す 元と一時の興に因る

立碑寧願百年存

碑を立てる 寧ろ百年に存するを願はんや

古來好事會餘跡

古來 好事 會らず跡を餘す

此處應名柳垞村

此の處 應に柳垞村と名づくべし

三四佳絶先暗二字妙。

三四佳絶、「先・暗」の二字、妙。

【訳文】何回も湾曲する溪流が、狭い門を塞いでいるようで、その門を掩っている樹木は鬱蒼としていて早く黃昏時が来るようだ。月は岸の半分を照らすように昇って、月光で雲が先づ白くなり、雨は深い山を過ぎて、川の水はひそかに濁る。竹を移し植えるのは、もともと一時の座興に因ってだし、碑を立てるのは、まさか百年後の存在を願ったりしようか。しかし、古來、風流人は必ず事跡を残すようだ。この山居の場所も、柳垞村とでも名づけたいと思う。

第三・四句は非常に良い。「先」と「暗」の二字の使い方が絶妙だ。

○月升 「月が昇る」というのは月なのに日の字が入って目ざわりなので、「月が升る」と。漢詩人の美意識。 ○半岸 山の端から出たばかりの月で岸辺の一方しか照らさないことをいう。

◎第一句が四句、第二句が三句に展開する。後聯が尾聯の前提となっている。大きく、前半四句の四句の山居の環境に対して、後半四句は、その中で、の事業を述べる構成である。

◎上平声十三元。

90 ◇14

穠風吹盡入蓬根

穠風 吹き盡して 蓬根に入る

野菓看来稍陪丹 野菓 看来れば 稍や丹を陪す
 陰地雨餘生驟冷 陰地 雨餘りて 驟冷を生じ
 澄潭霜老覺奇寒 澄潭 霜老て 奇寒を覺ゆ
 身因役使知常健 身は役使するに因て 常に健なることを知り
 心罷驅馳得自安 心は驅馳することを罷て 自ら安きことを得たり
 朝伴樵夫暮歸去 朝に樵夫に伴て 暮に歸り去る
 一擔風月醉郷寛 一擔の風月 醉郷 寛し

次聯能役使其身無世慮驅馳其心所以常健自安也。

次聯、能く其の身を役使し、世慮の其の心を驅馳すること無きは、「常に健にして、自ら安んず」の所以なり。

【訳文】秋風が吹き尽くして軒蓬に入つて転がしていき、野の果実
 が見ているとやや赤みを添えたようだ。日の当たらない土地では、
 雨があがつて急な寒さを生じ、澄み切った潭では、霜も重なつてひ
 どい寒さを感じる。体はいろいろ動かすことで、常に健康であるこ
 とがわかり、心はいろいろと気を使うことをやめて、自然に安らか
 さを得た。朝には木こりに伴て出かけ、暮になると帰つてくる。一
 かつぎの荷と清風と明月があれば、酒飲みの国でゆつたりくつろい
 でいるのだ。

後聯は、その体を使うことができ、世間を慮つて気を使うことが
 ないのは、「常に健康で、自然に安らか」の所以だと言っている。

○醉郷 酒に酔つた気分を別天地に喩えた。

◎起聯と前聯は第八句「風月」を具体化したもので、後聯は第七句
 の前提となつている。

◎上平声十四寒、一句末「根」は上平声十三元で通韻。

91 ◇ 15

笋鞋藤杖涉潺湲 笋鞋 藤杖 潺湲を渉る

漫步松風竹霧間 漫步す 松風竹霧の間

自笑心因山水醉 自ら笑ふ 心は山水に因て酔ふことを

不知身入畫圖還 知らず 身は畫圖に入て還ることを

菜樞處士名元憲 菜樞の處士 名は元と憲

陋巷先生姓舊顔 陋巷の先生 姓は舊と顔

此意尤欣古人在 此の意 尤も欣ぶ 古人の在ることを

世榮於我復何關 世榮 我に於て 復た何ぞ關らん

【訳文】竹皮の草鞋と藤の杖で、小川の流れを渉り、松や竹を通る
 山霧の中を散歩する。心が山水に酔いしれているのを自ら笑い、身
 体は画の中の人のようになって帰るのに気づきもしない。桑をとぼ
 そにする処士と言えば、名はもともと原憲だし、裏店に喜んで暮ら

す先生と言えば、姓はもともと顔回だ。こうした貧に甘んずる気持ちで非常に喜ばしいのは、既に古人の例があることだ。世間での宮達など、私はどうして二度と関わりうか。

○松嵐竹霧 松竹嵐霧と同じ。互文。 ○桑樞 桑の木のとぼそ。

貧居の喩え。「原憲居魯：桑以為樞」「莊子」雜篇・讓王 ○陋巷うらだな。「賢哉、回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。」「論語」雍也。

○世樂「不義而富且貴、於我如浮雲。」(『論語』述而)と同意。

◎前聯は起聯を展開し、後聯は尾聯「古人」を具体的に述べている。全体として、前半四句で山居の内容を、後半四句で隱遁生活の覚悟を述べる構成である。

◎上平声十五刪。

92 ◇16

元愛地偏因性偏 元と地の偏なるを愛するは 性の偏なるに因る

不妨人喚我為顛 妨げず 人の我を喚て顛と為すことを

朝兼草露収山藥 朝 草露を兼て山藥を収め

夜帶松風烹澗泉 夜 松風を帶て澗泉を烹る

有節工夫生夢裡 節有り 工夫 夢裡に生ぜん

無端穩字到吟邊 端無くも 穩字 吟邊に到る

閑中事業君知否 閑中の事業 君 知るや否や

探得詩函改舊聯 詩函を探り得て 舊聯を改む

后聯道沈吟之状尤工。其刻意若是宜哉其詩日進也。

后聯、沈吟の状を道て尤も工なり。其の刻意、是の若し。宜なるかな、其の詩、日々に進むや。

【訳文】もともと辺鄙な土地が好きなのは性格が変わっているからだ。まったくかまわない、人が私が狂っていると呼ぶ事も。朝には、草の露といっしょに山の葉草を集め獲って、夜には、松風を帯びて谷川の湧き水を沸かす。区切りがあつて、詩の工夫が夢の中に生まれるのであろう、ひよっこりと、適切な表現の字が、詩を作っているところにやってくる。さて、詩を作らない時、暇な時の仕事を、君は知っているだろうか。詩の箱から以前作つた聯を探して出して推敲するのだ。

後聯は、苦吟の状況を述べて非常に巧である。その苦心は、これほどなのである。もつともなことだ、その詩が日々進歩しているのは。

○地偏 「心遠地自偏。」「飲酒其五」(晉・陶潛)

◎前の詩と構成としては同じで、前聯は起聯の具体的展開で、後聯は尾聯の具体的前提である。そして、前半四句が後半四句の前提となる構成である。

◎下平声一先。

斜倚雲根架小橋
非通酒舍乃僧寮
半叢殘菊經霜健
一水餘烟至午消
墨為嫌埃頻滌硯
茶因愛氣密封瓢
閑來更取唐詩批
得意之場在寂寥

斜に雲根に倚て 小橋を架す
酒舎に通ずるに非んば乃ち僧寮
半叢の殘菊 霜を経て健に
一水の餘烟 午に至て消す
墨は埃を嫌ふが為に頻に硯を滌ひ
茶は氣を愛するに因て密に瓢を封ず
閑來 更に唐詩を取て批す
得意の場は寂寥に在り

【訳文】あぶなつかしく、山の高所に小さな橋を渡してある。酒屋に通ずる以外には、僧の寮へ通ずるくらいだ。叢の半分の残った菊は、秋の冷気をあびてかえって生き生きとし、一本の川の消え残った霧は、昼になってすっかり消えた。墨と言えば、埃を嫌うので頻りに硯を洗い、茶と言えば、その生氣を好むので瓢箪に密封しておく。暇があれば、更に唐詩を取り出して批評する。その最も意に合う箇所は寂寥の詩である。

◎起聯と前聯は、大風景と小風景の關係で、後聯は尾聯で言う「更に」の前提となっている。前半四句は景、後半は山居の情を述べる。

◎下平声二蕭

柴門深鎖被雲包
萬事渾於箇裏拋
幽味厭煩兼客斷
閑情愛淡與僧交
一篇花譜添評寫
數卷山書省注抄
半夜人清天正霽
亭々寒月中松梢

柴門 深く鎖して 雲に包まる
萬事 渾て箇の裏に於て抛つ
幽味 煩を厭て 客と斷つも
閑情 淡を愛して 僧と交はる
一篇の花譜 評を添て寫し
數卷の山書 注を省て抄す
半夜 人 清くして 天 正に霽る
亭々たる寒月 松梢に中る

花譜一篇耳。故添評寫之。山書則數卷所以省注而抄也。前對厭煩愛淡之意也。

花譜、一篇のみ、故に評を添へ、之を寫す。山書、則ち數卷、注を省て抄する所以なり。前對、煩を厭ひ淡を愛するの意なり。

【訳文】粗末な柴の門戸を深く鎖して、あたりは雲に包まれている。万事は全てこの場所では放棄している。静かな味を求め、煩わしいのを嫌って客は断っているが、閑かな気持ちで、淡いのを好んで僧とだけは交流している。一篇の花の図鑑に、評語を添えて手づから写し、數卷の山の書は、注の部分を省いて抜き書きする。夜中に、人は清らかな気持ちになり、天はちょうど晴れてきた。冬の月が、

高く聳え立つように松の梢のところに来た。

花の図鑑は一篇だけで短いので評語を添えて写し、山の書は数巻と長いので、注を省いて抜き書きする。前対は、煩わしいのを嫌い、淡い気持ちを好む、の意味である。

◎起聯を前後聯で展開し、山居の生活態度を述べる。尾聯では、その心中にふさわしい景を描く構成である。

◎下平声三肴。

95 ◇ 19

許般塵網得全逃	許般の塵網	全く逃ることを得るも
未免身因幽事勞	未だ免れず	身は幽事に因て勞することを
碁閣復経消竹雨	碁閣	経を復して 竹雨を消じ
琴窓案譜寫松濤	琴窓	譜を案じて 松濤を寫す
山枯處々多奇石	山は枯て	處々 奇石多く
泉烈家々足美醪	泉は烈して	家々 美醪足る
五畝肥磽君莫議	五畝の肥磽	君 議すること莫れ
梅花標格瘦來高	梅花の標格	瘦せ來て高し

【訳文】このような俗世間のしがらみから完全に逃れることができず、いまだに免れることのできないのは、風流事に体を勞さなく

てはいけないことだ。碁を打つ小部屋では、經典を復唱して、竹にそそぐ雨音を消し、琴を弾く部屋では、楽譜を考えて松風の音を写し取る。山は枯れて、到るところ奇石が多し、湧き水は激しくて、家々では美しい酒が十分ある。五畝の土地が肥えているの瘦せているのと言わないで欲しい。梅花の品格というのは、瘦せていてこそなのだから。

◎前聯は起聯を具体的に展開させ、後聯は尾聯の具体的前提である。前半四句は第八句の「標格」の具体的内容となつてゐる。

◎下平声四豪。

96 ◇ 20

微風淡々弄陽和	微風	淡々として 陽和を弄す
野鳥相呼入薜蘿	野鳥	相呼て 薜蘿に入る
遠岸添花雲色重	遠岸	花を添て 雲色 重く
近隣隔竹雨聲多	近隣	竹を隔てて 雨聲 多し
如非道士携經到	如し道士	の経を携へ到るに非ずんば
必有山人載酒過	必ず山人	の酒を載て過る有り
薄暮客婦眠亦醒	薄暮	客婦り 眠り 亦た醒む
香烟一篆遶書窠	香烟	一篆 書窠を遶る

七之句曰客婦眠亦醒其對客眠可知矣坐忘之意在文字之外而可掬也。

七の句、「客帰り眠り亦た醒む」を曰ふ。其の、客に對して眠る、を知るべし。坐忘の意、文字の外に在りて、掬すべきなり。

【訳文】そよ風があつさりと、のどかな春景色を弄ぶように吹き、野の鳥は互いに呼びあつて葛蔓の中に入っていく。遠くの岸へには花が見え景色に添えているが、霞は重く垂れ込め、隣近所とは竹藪を隔てているので、雨にあたつて音が大きい。ここにやつて来るのは、もし經典を携えてやつて来る道士でなければ、それは必ず酒を積んで過ぎる木こりなのである。夕暮れ時、客が帰つて、私は眠りそして目が覚める。そうすると、お香の、篆書のような煙が一筋、書齋をめぐつてゐるのだ。

第七句めの、「客が帰つて眠りが醒めた」と言うその意味は、「客がゐるのに眠つていた」のに気づくべきだ。無我の境地に遊ぶ意味が、書いてある文字以外に表現されているのを、読み取るべきであろう。

◎起聯で春の大風景を述べ、前聯でそれを遠近の小風景に展開する。後聯は第七句「客」を具体的に述べたもので、前半四句は春景、後半四句はその中で山居の一場面を述べる構成である。

◎下平声五歌。

97 ◇ 21

書齋詩客我生涯 書齋 詩客 我が生涯
鞍馬蓋車寧足誇 鞍馬 蓋車 寧ぞ誇るに足らんや

丘壑興如波底月 丘壑の興は波底の月の如く

市朝事似雨前花 市朝の事は雨前の花に似たり

月光雖汲常無盡 月光 汲むと雖ども 常に盡ること無く

花色一衰終亘加 花色 一たび衰るときは 終に加ふべからず

寄語世間多少士 語を寄す 世間多少の士

莫貪富貴忘烟霞 富貴を貪て烟霞を忘ること莫かれ

丘壑興承詩書市朝事承車馬。以第五解第三以第六解第四以富貴烟霞結之。一奇體也。連詠之間所以避雷同也已。

丘壑の興、詩書を承け、市朝の事、車馬を承く。第五を以て第三を解き、第六を以て第四を解き、富貴烟霞を以て之を結ぶ。一奇體なり。連詠の間、雷同を避くる所以なるのみ。

【訳文】書齋で詩にひたる人、それが我が生涯だ。鞍を置いた良馬や天蓋の附いた豪華な車など、どうして誇るに値しようか。山の興趣は波に映る月のようで、街中の事は雨の前の花に似ている。そのわけは、月の光は、いくら汲んでも常に尽きることがないが、花の色は、一たび衰えると、もう付け加えることはできないということ。だから言葉を送ろう、世間の多くの人々よ、富貴を貪つて風流を忘

れてはいけない、と。

第三句「丘壑の興」は、第一・二句の「詩・書」を受け、第四句「市朝の事」は、やはり第一・二句の「車・馬」を受けている。第五句で第三句を解き明かし、第六句で第四句を解き明かす。そして第八句「富貴・烟霞」で全体を結ぶ。珍しい一形式である。連作の中間で、他の詩と似通うのを避けた所以である。

○書窠 前詩の末尾「書窠」を継いでいる。 ○回 不可の合字。

○中野素堂評にあるように、一、三、五句と二、四、六句がそれぞれ一連となつて、前者が第八句の「烟霞」後者が「富貴」を受ける構成となつている。素堂が「一奇体」というこつした構成は以前にもあつたが、三句から五句は「月」四句から六句は「花」と字を重用しており、続き方がより明確である。

◎下平声六麻。

98 ◇ 22

屋後園庭三畝強
四時將欲貯群芳
隨僧受保落花咒
因客求醫病竹方
山雨到頭雲脚重

屋後の園庭 三畝強
四時 將に群芳を貯んと欲す
僧に隨て落花を保するの咒を受けて
客に因て病竹を醫するの方を求む
山雨 到頭 雲脚重く

林風過底水聲香 林風 過底 水聲香し
無涯景象晨昏改 涯無き景象 晨昏に改る
都属幽人醉一場 都て幽人に属して 醉ふこと一場せしむ
三四之句頗僻。

三四の句、頗る僻。

【訳文】建物の後ろの庭は三畝強の広さで、四季折々、様々な花々を貯えようとしている。僧に従つて落花を防ぐための呪文を受けて、客から病竹を治す方法を求める。山の雨が到るところでは、雲が脚のように重く伸び、林の風が過ぎる下では、川音が香しく感じられる。涯もなく風景は朝晩に入れ替わる。それらは全て私のような風流人のもので、一回ずつ酔わせてくれる。

第三・四句は、やや変わつている。

○酔一場 唐・白居易「感櫻桃花因招飲客」詩に「誰能聞此來相勸、共泥春風醉一場。」の句がある。

○前聯は起聯を具体的に展開したもの。その前半四句と後聯を第七句「景象」で受けて結ぶ構成である。

◎下平声七陽。

農舎春深斷送迎 農舎 春 深くして 送迎を斷つ

溪光山色總閑清 溪光 山色 總て閑清

飛花滿地人不掃 飛花 滿地 人 掃はず

落日孤村鳥自啼 落日 孤村 鳥 自ら啼く

貧去唯慙添酒債 貧し去て 唯だ慙つ 酒債を添ふることを

病来不管少詩名 病来 管せず 詩名を少くを

醒疑醉裡瞢騰夢 醒て疑ふ 醉裡 瞢騰の夢

何事更追流水行 何事の更に流水を追て行く

前對柳垞得意處凡施圈點者皆然通百世詩家不得廢者也。

前對、柳垞、得意の處なり。凡そ圈點を施す者、皆な然り。百世を通じて、詩家の廢するを得ざる者なり。

【訳文】農家では、春も深まって客の送迎はすっかり絶っている。谷川の風景や山の景色、すべて人に見られることもなく清らかだ。飛び散った花びらは地面いっばいで、だれも掃いもしないが、孤絶した村に日が沈みかかるところ、それでも鳥は自然に鳴く。貧乏しきっているが、ただ慙じるのは、酒の借りがあることだけで、病してからは、詩名のあがらないことなどどうでもよくなった。酔っている最中にうっとり夢みたのを、醒てからは疑わしくなる。夢の中では、

何のために更に更に水の流れを追いかけて行ったのだろうか。現状に満足しているのだから、桃源郷を求めなくてもいいのに。

前對は、詩佛の得意の箇所である。まず、詩に圈点を加えて批評するほどの者なら誰でもそうするだろう。百代の後までも、詩人として無視することができない作品である。

◎第一句は三句、第二句は四句に展開し、山居の孤高と閑静な景を述べ、後聯は尾聯「醉裡」の前提となつている。前半部は、流水を追う必要がないという第八句の前提となる構成である。

◎下平声八庚。「啼」は上平声八齊の韻目。「鳴」(下平声八庚)か。

100 ◇ 24

鳥啼響枕睡初醒 鳥啼 枕に響て 睡り初て醒む

日影時移午欲亭 日影 時移りて 午 亭ならんと欲す

摘菜應唯從竈婢 菜を摘む 應に唯だ竈婢に従すべし

灌園何必課畦丁 園に灌ぐ 何ぞ必ずしも畦丁を課せん

蕉元一種佳牋紙 蕉は元と一種の佳牋紙

山是天然好画屏 山は是れ天然の好画屏

滿眼風光取無禁 滿眼の風光 取るとも禁すること無し

多々皆入我詩聲 多々 皆な我が詩に入て聲し

額聯、隱居之實境可嘉。

額聯、隱居の實境、嘉すべし。

【訳文】鳥の鳴き声が、枕元に響いて眠りからやつと覚めた。日の影は、時に従って移つていき、もう正午になろうとしている。野菜を摘むのは、ただ炊事婦に任せようと思うが、庭に水を撒くのは、どうして必ずしも作男にやらせるまでもない。芭蕉の葉はもともと一種の美しい紙と言えるし、山々はまさに天然の素晴らしい画の屏風だ。目いっぱいひろがる風景はいくらでも取り放題だ。多くの風景は皆な私の詩の中に入ってもらって、りっぱになっている。

前聯は、隱居の實際の様子で、なかなかよい。

◎前半四句は隱居の實際、後聯は周囲の環境、尾聯で両方の関係を述べてまとめる構成である。

◎下平声九青。

101 ◇25

未容人用酒仙稱 未だ容さず 人の酒仙を用て稱することを
瘦盡茲身興自仍 茲の身を瘦せ盡して 興 自ら仍る
醉眼看花明作暈 醉眼 花を看れば 明 暈を作す

詩腸説水冷生癩 詩腸 水を説けば 冷 癩を生ず

穿来叢竹呼飢鶴 叢竹を穿ち来りて 飢鶴を呼び

踏破深苔訪病僧 深苔を踏破して 病僧を訪ふ

再々溪烟天欲晚 再々たる溪烟 天 晚れんと欲す

夕陽斜射亂雲層 夕陽 斜に射る 亂雲の層

【訳文】まだまだ受け入れられない、人が酒仙と私を呼ぶことは。そうはいつても、この身は瘦せきつたので、自然に興も増えてきた。例えば、酔った眼で花を見れば、明るさに暈が生じるし、詩の心から、酒でないただの水を表現すれば、冷たさに腸にしこりができるようだ。竹藪を穿つように通り飢えた鶴を呼び、深い苔を踏んで、病いの僧を訪ねる。しなやかな谷川の霧が出てきて、空も晚れようとしている。夕陽が斜に、乱れ雲の層から射している。

◎酒仙 杜甫の「飲中八仙歌」に李白を描いて「自称臣是酒中仙」の句がある。

◎起聯の酒仙の興を前聯で具体的に展開する。後聯は、第七句「天欲晚」の前の時間の行動を示す。前半四句は山居の一般的な感慨であり、後半はある日ある時の情景である。

◎下平声十蒸

102 ◇26

亂雲層裡草堂幽

亂雲層裡 草堂 幽なり

風物且看終古稠

風物 且つ看る 終古に稠きを

壞道草荒藤上石

壞道 草荒て 藤 石に上り

斷橋苔合竹臨流

斷橋 苔合して 竹 流に臨む

花朝有句命兒寫

花朝 句有り 兒に命じて寫さしめ

月夕無醜與婦謀

月夕 醜無し 婦と謀る

疎懶頼因逢聖世

疎懶 頼に聖世に逢ふに因て

未知進退先人憂

未だ知らず 進退の人に先じて憂ることを

齊韻青韻詩起句承前詩合句麻韻及此詩起頭用前詩末字造意不一所以使人不厭看也。

齊韻青韻の詩の起句、前詩の合句を承く。麻韻、及び此の詩、起頭、前詩の末字を用ゐる。造意、一ならず。人をして看るを厭はざらむ所以なり。

【訳文】乱れ雲が重なる中に、草堂がひっそりと建っている。その風物は、長い年月に茂っているのを、あちこちで見える。例えば、壊れた道では、草が荒れ放題で、藤のツタは石にはい上っており、落ちて渡れぬ橋では、苔が合わさつて、竹は流れに臨むように伸びている。春の花の朝には、詩句ができ、兒に命じて写させておくが、秋の月の夕べには、どぶろくもないので、妻と算段をする。ものぐ

さな人間であるが、幸いによく治まった世にめぐり逢ったので、いまだに、国が進むか退くかを民より先に心配しなければならぬなどということはない。

上平声八齊の韻の詩と下平声九青の韻の詩の一句目は、前の詩の最後の句の内容を受けている。また、下平声六麻の韻の詩とこの詩は、一句目の冒頭、前の詩の末の字を用いている。その工夫は、一通りではない。読者に飽きさせないためである。

○先人憂 「先憂後樂」の成語がある。民衆に先だつて天下のことを憂え、民衆が生活を樂しめるようになってからのち、樂しむ。政治家たる者の心がけ。(「范仲淹・岳陽樓記」)

○八齊の詩は本稿では通し番号84、九青の詩は100、六麻の詩は97である。

○第一句「幽」を前聯で、第二句「風物」を後聯で具体的に展開させ、前聯と後聯を第七句の「疎懶」で受ける構成である。

◎下平声十一尤。

103 ◇27

日取詩牌費苦心 日々に詩牌を取て苦心を費す
心中未受點塵侵 心中 未だ點塵の侵すを受けず
將添貌々足三友 將に貌々を添て三友に足さんとす

非學呦呦試五禽 呦呦を學て五禽を試むるに非ず

風快蘋花平岸緑 風は快なり 蘋花 平岸の緑

月竒蕉葉半床陰 月は竒なり 蕉葉 半床の陰

使人狂處看々見 人を狂せしむる處 看すみす見よ

別有幽情一段深 別に幽情一段の深き有り

呦々林和靖所養鹿名。竒對也。若入楊博南謝華啓秀則可以壓卷矣。

呦々は、林和靖の養ふ所の鹿の名なり。竒對なり。若し楊博南が『謝華啓秀』に入れば、則ち以て卷を壓すべきなり。

【訳文】日々、三十韻を記した作詩用の札を取り上げては苦心をしている。頭の中はそれでいっばいで、いまだにわずかな俗事も受け付けない。ゲキゲキと鳴く鷺鳥を三友に加えようとしているが、林和靖の飼う鹿のヨウヨウがヨウヨウと鳴くのを学んで五禽という動物を真似する養生法を試みているわけではない。風は快く吹き、浮草の花の緑は広々とした岸にいっばいで、月は美しく耀き、芭蕉の葉の陰を床半分に落としている。人を狂わせるような苦吟をしている時、よく周りを見つめよ。そこには特別に趣向の一段と深いものがあるのだ。

呦々というのは、宋の詩人林和靖が養っていた鹿の名である。珍し

い対といえよう。もし、明の楊博南が名対を集めたその著書『謝華啓秀』に入れば、全巻の他の対を庄倒するであろう。

○詩牌 上下三十韻をしるした紙、または木札。詩会で韻目を各人に分けるのに用いる。この場合、三十韻全てを使ったこの三十首連作のことを言う。○駝々 鷺鳥の鳴き声。駝は鳥名。○呦呦 鹿の鳴き声。また、素堂評にあるように林和靖の飼う鹿の名という。

○五禽 五禽戯。漢末の名名医華佗が考えた一種の健康術。五種の禽獣の動作を模倣する。五種は虎、鹿、熊、猿、鳥という。○林和靖 林逋（九六七～一〇二八年）は宋代の詩人。字は君復。○楊博南 楊慎。明の人。『謝華啓秀』の著者。○謝華啓秀 対句を集めた佳句集。

○前聯は起聯を具体的に展開し詩人の心中を述べ、第七句の「狂處」につながり、後聯は第八句の「幽情一段深」の具体的前提となっている。

◎下平声十二侵。

104 ◇28

山中風味我能諳 山中の風味 我能諳んず

只恨無人可共談 只だ恨む 人の共に談すべき無きことを

竈與地黄蒸白木 竈は地黄と與に白木を蒸し

園同葱白斂黃柑 園は葱白と同じく黃柑を斂む

老松横水半枝浸 老松 水に横て 半枝 浸し

長葛懸崖數蔓覃 長葛 崖に懸て 數蔓 覃ふ

牽杖閑行求句去 杖を牽て 閑行 句を求め去れば

斜陽認得欲成嵐 斜陽 認め得たり 嵐と成んと欲するを

前聯老手段。以字法勝者也。

前聯、老手段。字法を以て勝る者なり。

【訳文】 山の中の食物の味わい深さというものを、私はすべてわかっている口に上すことができる。ただ残念なのは、共に話し合うことができる人がいないことだ。竈では地黄と共に白木耳を蒸し、庭では白葱といっしょに蜜柑などを集め植えている。古い松は川の面に横たわつて、枝の半分は水に浸るほどで、長い葛は崖に懸かつて、蔓が何本かはびこっている。杖を撞いて散歩して詩句を求め行くと、斜めにかたむく夕日が、嵐気となろうとしているのを見定められた。

前聯、老練な手段である。字の用い方が優れているものである。

○地黄 葉草の名。○白木 白木耳。茸の一種で、不老長寿の薬。

○葱白 葱の白い部分。ここは葱。○黄柑 柑橘類の一種。○

嵐 嵐気。山の清らかな風や空気。

◎前聯の字法とは、地黄と白木、葱白と黄柑と白と黄を逆にして対にしたことを言うのであろう。

◎前聯は、第一句「風味」の具体的展開で、後聯は第七句「閑行」の具体的な景である。前半の「無人可共談」が後半の「閑行」につながる。

◎下平声十三覃。

105 ◇ 29

更覺寒威漸々添 更に覺ふ 寒威 漸々と添ふるを

雨聲忽急霰聲兼 雨聲 忽ち急にして 霰聲 兼ぬ

兒扶避漏移藜榻 兒に扶れて 漏を避て 藜榻を移し

手自修窗補紙簾 手自ら 窗を修て 紙簾を補ふ

近日詩皆因病得 近日の詩は皆な病に因て得

来春晴預為花占 来春の晴は預め花の為に占ふ

傍人莫恠吾癡了 傍人 恠しむこと莫れ 吾が癡了するを

風雪之時酒禁嚴 風雪の時 酒禁 嚴なり

【訳文】 一段と、寒威がじわじわと加わるのを感じる。外では雨音が急に起こり、霰の音も交じっている。兒に手伝ってもらい、雨漏りの箇所を避けて藜の長椅子を移動し、手づから窓を修理して、障子紙を繕った。近ごろの詩は皆な病氣から発想を得ているが、来春こそはと、その晴れ具合を花のために予め占っている。だから、傍

らの人たちよ、怪しんではいけない、私がそんな馬鹿なことばかりしているのを。この風雪の寒い時期は、病の為の酒の禁が特に厳しく、酒が飲めないのだ。

◎前聯は起聯の具体的展開で、前半は第八句「風雪之時」を表し、後聯は第七句「癡了」の具体的内容となっている。七句「癡了」の所以を第八句で述べて結ぶ。

◎下平声十四塩。

106 ◇ 30

吾是常南一布衫
多年為客落塵凡

吾は是れ常南の一布衫
多年 客と為て 塵凡に落つ

人情寧怪冷於凍

人情 寧ろ怪んや 凍よりも冷なるを

世路偏悲險似巉

世路 偏に悲しむ 巉よりも險なるを

寒竹一叢今孰領

寒竹一叢 今 孰か領す

殘花數點合蜂銜

殘花數點 合に蜂のみ銜むべし

何時風景得真對

何れの時か 風景 真に對するを得む

須改茲詩開韻函

須らく茲の詩を改めて韻函を開くべし

人在市朝賦山居之題者多不免為強作徒言矣。此一詩奇々怪々實出人
意之外。

人の市朝に在て山居の題を賦す者、多くは強作徒言を為すを免れず。此の一詩、奇々怪々、實に人意の外に出づ。

【訳文】私は常陸の南の一庶民に過ぎない。長年、旅人となって俗世間の塵の中に墜ちていた。そこでは、どうして怪しもうか、人情が氷よりも冷たいことを。そして、ひたすら悲しむことだ、世を渡る道が切り立った山々よりも険しいことを。故郷では、冬の竹が一群、今は誰のものとなっているのだろうか、残った花が数個あるが、これは蜂だけが啄むことができるだろう。いつになったら、詩の上でなく本物の風景に対峙することができるだろうか。そうしたら是非とも詩の箱を開いて、この山居の詩を改めなくてはならない。

街中に住んでいるのに山居の題の詩を賦す詩人の多くは無理で無駄な言葉を弄するのを免れない。この一詩は、素暗らしいことに、珍しく本当に人の意表を突く出来ばえた。

◎常南 詩佛は常陸国久慈郡袋田村の生まれである。

◎前聯は第二句「塵凡」を具体的に述べ、後聯は第一句の故郷の「常南」の景である。そして、それは第七句の「風景」の「真」につながる。第八句は連作全体の結びとなっている。

◎連作最後の詩は、この「山居」詩は江戸住まいの作者が故郷常陸の風景を想起して作ったものであることを明かす、という意外な内

容になっているのを、山居を題詠するだけでない真情が表れている。素堂は評価している。

◎下平声十五咸。